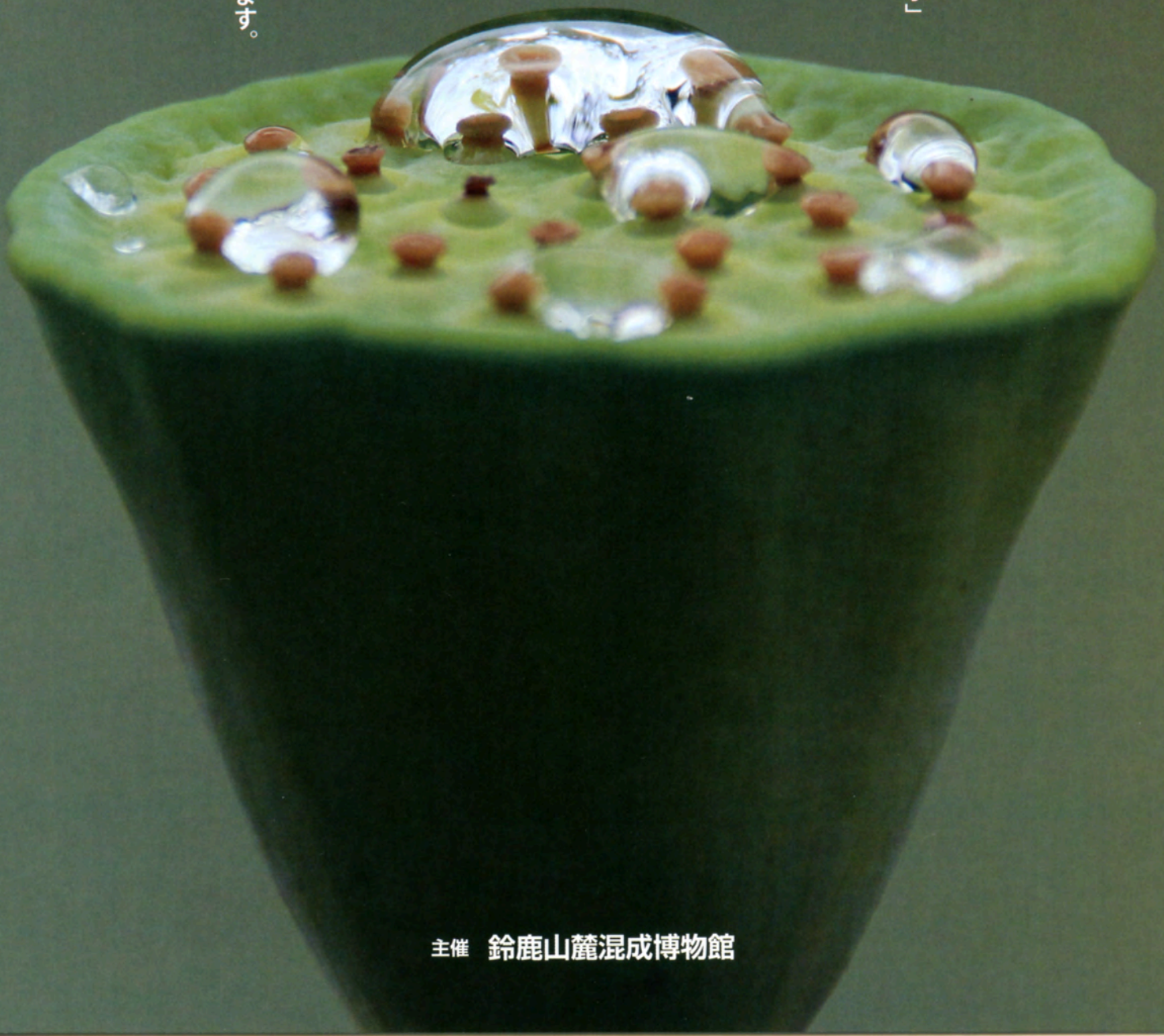
鈴鹿山麓混成博物館フォーラム2019

水の悦び

生き物にとって最も大切なものは「水」
人間もその生き物の一員
良き水を得る事への切願が、
日本の文化の基層に流れています。

とりわけ、真水の浄土「琵琶湖」と
暮らす近江には、
水に対する想いが色濃く残され、
これを知ることが、
現在、そして未来の水の文化を
創造することに繋がるのでは
ないでしょうか。

今回のフォーラムは、
水と人間との関わりを、
鈴鹿山麓をフィールドに、
自然・暮らし・祈りからアプローチします。



主催　鈴鹿山麓混成博物館

岩と水と祈りの物語
～景観をつくる多賀町の岩と水～

多賀町立博物館　館長　小早川隆

多賀町は西の平野を扇の要とし、東へ3つの羽根を広げた形状をしている。北の羽根にあたるのが芹川の谷、中央のそれが犬上川北谷、南が犬上川南谷である。多賀町の暮らしはこの3つの谷の岩と川がせめぎ合う歴史の中で生まれた。

犬上川の白き岩肌

犬上川の北谷と南谷は川相で合流する。その後、しばらくは緩やかな流れが続くが、平野へ広がる直前で巾着袋の口を閉じるかのように川幅が狭まる。要因は両岸から迫る萱原溶結凝灰岩と呼ばれる岩にある。岩は緻密で硬く、水はこの岩に阻まれて容易に流れることができない。水は長い年月をかけて岩を穿ち、また削ることを繰り返しながら水路を切り拓いてきた。岩と水が格闘することによって、ゴツゴツした硬い岩は滑らかな美しい曲線美をもつ白い岩肌にうつり変わった。水の神の「大滝神社」は悠久の時を越えた岩と水の戦いの地に祀られている。

白蛇の鱗のごとし

水によって磨き上げられた結果、白い岩肌に多数の偏平な形をした模様が浮き出てきた。この模様は大小あるが一定の方向に並び、水しぶきを浴びるとより明瞭になり、まるで白蛇の鱗のようにも見えてくる。全体に緑がかって見えるこの模様の正体は萱原溶結凝灰岩に含まれる「軽石」である。町内で「軽石」が「鱗模様」に見えてくる場所は大蛇ケ淵において他にはない。

水と節理が生み出した小渓谷

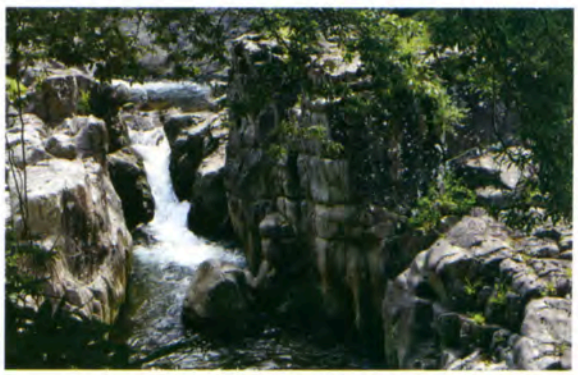
緻密で硬い岩も大地の力により割れたり砕かれたりする。岩が形成される過程でできた自然の割れ目を「節理」と呼ぶ。大蛇ケ淵の岩にもおよそ3つの方向に割れた節理が見られる。水が硬い岩を穿ち、また削りしながら水路を切り拓こうとするとき、節理の部分を先ず攻撃する。その結果、水平方向の節理が階段状の踊り場を形成し、垂直方向の節理が水路となり水を落下させる。水平と垂直方向の節理に沿った流れが変化をつくり、白く泡立つ激流ができたのである。大蛇ケ淵の小渓谷は水が節理に沿って彫刻した自然の造形物である。

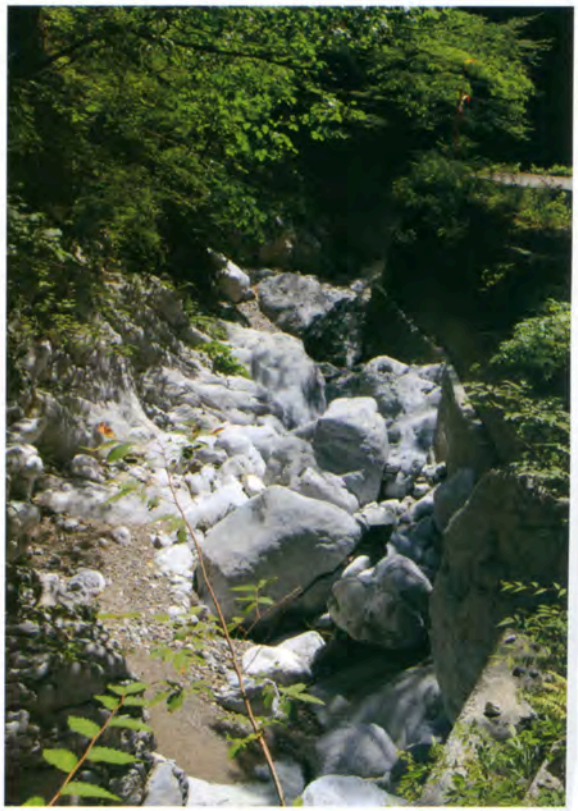
芹川の狭く白い河床

芹川の特徴はなんと言っても石灰岩を敷き詰めた白い河床にある。石灰岩は黒緑色をした玄武岩（緑色岩）によって包み込まれ、そのこともあって白さが際立つのである。山間部を流れる芹川は段丘や谷底平野を形成することなく、狭い谷を縫うように流れる。狭い谷に特有の暗さを感じることが無いのは白い河床のおかげである。最上流部

大蛇ケ淵の美しい曲線美をもつ白い岩肌

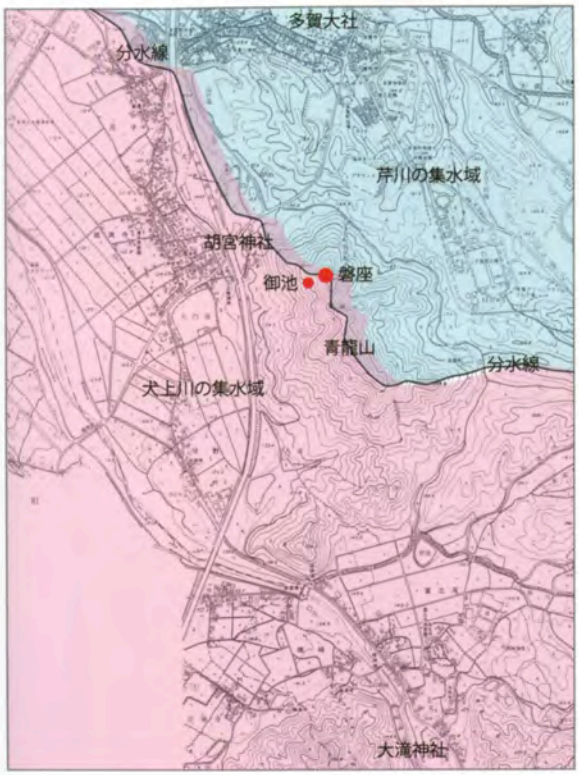
大蛇ケ淵の岩肌に浮き出た模様


大蛇ケ淵の節理に沿って流れ落ちる水


権現谷の白く輝く谷

大滝神社の溶けた石灰岩(「犬胴松の石」)

多賀大社境内のさざれ石



青龍山をよぎる分水線と磐座、胡宮神社の位置

青龍山の北端のピークに祀られた磐座

の権現谷はさらに狭くなり岩が道を被うようにせり出し恐怖を感じる。一方、谷底には神々しいほどの白い巨岩。「権現谷は神の世界への入口」という教えに納得する。周辺では河内風穴をはじめとして40個以上の洞窟が確認されている。覆い被さるような権現谷の峡谷は、かつての洞窟の天井が崩落して形成されたと考えるのが適切だろう。

溶ける石

石灰岩は風化浸食に弱く特に酸性の雨水には容易に溶かされる。要因は岩を造っている成分が貝殻等と同じ炭酸カルシウムだからである。石灰岩は古代の貝や珊瑚等の生物の遺骸が集積したもので形成されているので、酸性の水に溶けるのは当然といえる。芹川上流域のように石灰岩が広く分布する地域ではカルスト地形という特異な景観を生み出す。この景観は石灰岩が水に溶けて風化浸食されていく一時期を見ていることになる。

芹川と犬上川を治める青龍山

多賀町の水は雨や雪によってもたらされ、芹川または犬上川に流入する。川が水を集める地域を「集水域または流域」と呼び面積が広いほど集まる水量が多くなる。芹川と犬上川の集水域の境目(分水線と呼ぶ)を辿ると、青龍山の磐座が現在の位置に祀られた謎が解ける。

芹川と犬上川の分水線は、県境の三国岳の北方から高室山の頂上に向かって延び、杉の集落へ大きく蛇行した後、南下し梨の木峠へと続く。梨の木峠から西に向かってきた分水線は青龍山の尾根づたいに頂上に達してから北へ転向し、北端のピークを経て胡宮神社、多賀SAそして平野へと下りていく。つまり、青龍山の尾根が分水嶺となり、尾根の西に降った雨は犬上川へ、東に降った雨は芹川に流れ込むのである。

水の神の「龍神」を祀る磐座は分水線が平野へと下る北端のピークにある。磐座がなぜ青龍山の頂上ではなく、ここなのかはその場に立ってみるとわかる。磐座は鎮座ます神にとって右手に芹川、左手に犬上川が眺望でき両河川の水を治めるには最適の場所。そのことは、芹川の水を祀る「多賀大社」と犬上川の水を祀る「大滝神社」をも一手に治めることにつながるのである。青龍山は名実ともに多賀町の水神が宿る山といえる。

上空から見た青龍山、芹川、犬上川

魚がむすぶ神と人

滋賀県立琵琶湖博物館学芸技師　渡部圭一

はじめに—神饌における海と湖

いわゆる「尾頭付き」の魚というものは、寺社の祭りや祝いの席に欠かせない存在である。それも地域によって、一定の魚種がとくべつな扱いを受ける傾向がある。海なし国の近江にあってはイワシ、トビウオ、シイラなど、外から持ち込まれた海の魚を軽視することはできないが、その一方で、フナ類、モロコ類、ドジョウなどの淡水魚が、地場消費の延長上で、ユニークな調理を経て神饌とされる事例も豊富である。

湖岸の淡水魚神饌—フナ類

湖南地域の神社のいくつかには、湖をめぐる神話と儀礼がある。小津神社（守山市杉江）の由緒には、洪水で社殿が琵琶湖に流出し、その後神霊を湖中から迎えたとする、一種の漂着神の説話がある。荒ぶる水域としての琵琶湖が投影された形だ。湖ではないが、水害常襲地であった野洲川デルタの村々には神輿の漂着伝説なども散見される。

近江屈指の古社のひとつ兵主大社（野洲市五条）は、大津市坂本の穴太の地から琵琶湖上を渡り、現在の場所に遷座したと伝える。長らく秘儀として執り行われてきた八ヶ崎神事は、浜辺で修祓をした後、神職が湖中を沖まで進み、祝詞を奏上、さらに神体とともに神職が入水するという、きわめて特異な内容をもつ。

下新川神社（守山市幸津川）の社伝にも、湖西側から湖を渡ってきた祭神を祭祀したことに始まるとある。毎年五月五日の例大祭には、当番組の若者二人が神前でニゴロブナのすしを切り分ける、一種の包丁式の神事がある。これもまた祭神を迎えた村人が鮒を献上したことにちなむ。幸津川の春祭りではフナのほかにも多彩な淡水魚が消費される。

内陸の淡水魚神饌—ドジョウ

なれずしの神饌は、天神社（滋賀県草津市下寺）や下寺天満宮（草津市津田江）、そのほか近江各地に散見されるが、これより内陸部に目を移すと、淡水魚神饌の中心になるのはドジョウである。著名なのは三輪神社（滋賀県栗東市大橋）で、練達のスシツケ人が腕をふるうドジョウのなれずしは、県下に類例がない。かつて人身御供の代わりにドジョウのすしを供えるようになった、という伝説をともなうのも特異である。

白鬚神社（蒲生郡日野町蓮花寺）の宮座行事である「どんじょ祭」に登場するドジョウ汁と五菜汁は、当屋から鍋などを運び込み、境内で煮炊きをする一種の神前調理の例である。うまそうに湯気をあげる温かい汁ものを給仕、共食する姿は、いわゆる熟饌がゆたかであった時代の宮座のありかたを彷彿とさせる。

湖岸の村と内陸の村の淡水魚神饌を見比べる際には、魚の種類や消費のありかただけでなく、大量の魚をどう調達するかも興味ある問題だ。上述した三輪神社や白鬚神社では、祭りにあたり共同の魚つかみがともなっていた。これは内陸のため池などで、湖岸の地域よりも組織的な共同漁撈が発達していることとも符合する事実として、重要な意味をもつ。

ニゴロブナ

ドジョウ

下新川神社のすし切り神事（2016年5月5日、金尾滋史撮影）

下新川神社のふなずしの献饌（2017年5月5日）

下新川神社のガンゾの味噌汁の材料（2016年5月4日）

草津市下寺のすし切り神事（2016年1月10日）

草津市津田江のすし切り神事（2016年1月9日）

栗東市大橋のどじょうのなれずし（2015年5月3日、金尾滋史撮影）

蒲生郡日野町蓮花寺のどじょう汁（2015年4月19日）

日本武尊と大蛇の葛藤 水を利する

景行天皇43年、東国に対する侵略戦争に勝利した日本武尊は、尾張の宮津媛の元に戻り、ここで「伊吹山に荒ぶる神」がいることを知る。武尊は媛の元に草薙剣を残し、単身で伊吹山に登る。ここで伊吹の神は白き大蛇となって現れるが、武尊は、これを神の僕(しもべ)と見誤り「伊吹の神など素手で殺してやる、神の手下など、帰りについでに殺してやる」と暴言を吐き、神の怒りを買い、雨霰を打ち付けられ命を落とす。

日本武尊は、その名が示す通り、日本をその支配下に置こうと策動する大和政権の象徴である。その武尊が伊吹の神の怒りを受けて命を落とす。伊吹の神は白い大蛇となって現れ、雨・霰を降らせた。まさしく荒ぶる水神の姿である。

伊吹山は、琵琶湖の北東に聳えることから、琵琶湖の鬼門を護る山であり、琵琶湖の観念的な水源と意識されてきた。伊吹の神との闘いは、大和政権による水利を介した、近江の開発の過程とも理解することができる。

農地の開発と水利

農地の開発は水利の整備を意味する。山から流れ出る川は、自然の流れのままでは利用できない。自然の川を開発者の意のままに制御しなければならない。特に取水が重要なポイントとなる。水は、決して上には流れない。川の水を田面に導くためには。田面よりも川底が高い上流に堰を造り、ここから水を延々と導かなければならない。しかし、川もおとなしく人間の言いなりになっているわけではない。水量の豊かな川ほど、時として暴れる。その川の暴力は人間が作った構造物を流し去り、時として人間の命をも奪う。

この自然の川を神として意識するのは当然の心象であろう。そして川(水)の神として招かれたのが「蛇」である。

蛇神の登場

蛇は水田等の水辺を好み、稔を喰う鼠を喰う。そしてそのうねりは川の流れそのものである。また、脱皮を繰り返すことにより命が蘇る神秘性を持っている。しかし、敵を一撃で倒す毒を持つものもいる。これらの複雑な蛇の姿は、容易に水を司る神の姿に重なった。そしてこの神は時として怒りを発する

日本武尊に戻ろう。武尊は、近江を制するために、近江の開発に挑戦した、大和の先兵だったのかもしれない。しかし、近江の水を制することは難しく、多大な犠牲を強いられた。この犠牲の象徴が武尊自身である。

時が遷り、奈良時代。近江国司となった藤原武智麻呂は、伊吹登山を敢行する。日本武尊の故事を知る者たちが、伊吹の山の神の祟りを恐れ、大和の武智麻呂を制するが武智麿はこれを無視して登る。ここに伊吹の神が蜂となって現れ、武智麻呂にまとわりつくが、武智麻呂はこれを振り払い頂上に至った。この話は、伊吹の神(近江の水利)が大和に屈した歴史を表している。

犬上川の大蛇 [犬神伝説]

昔、犬上川の上流に祟りをなす大蛇が棲み、人々を苦しめていた。日本武尊の長男である稲依別王(いなよりわけのおう)は、愛犬小石丸を伴い、大蛇を退治するため川を遡った。しかし大蛇は現れない。疲れた王は巨木の傍らで眠りに落ちた。すると、小石丸が激しく吠え立てる。王はなだめるが、なおも吠え続ける。怒った王は小石丸の首を刎ねてしまう。すると小石丸の首は梢に飛び上がったかとおもうと、何者かと戦う気配がし、やがて大蛇の首に噛みついたまま川に落ちた。小石丸は樹上から王を狙う大蛇に気付き、危機を知らせるために吠え続けたのだった。

犬上川に伝わる神話では、日本武尊の縁者が蛇神と戦い、小石丸という大きな犠牲を強いられる。この神話も、犬上川の開発と関連付けることができる。

蛇砂川と白鳥神社

愛知川の左岸に延びる布引丘陵。その北を蛇砂川が流れている。この川は唐突に始まり、溜池からの排水などを集め、太さを増したり、減じたりしながら蒲生野の中を複雑に流れ、最後は西の湖に入る、人工的に整備された印象の強い川である。この蛇砂川の流域には何故か、彼の日本武尊を祀る白鳥神社が6社も集中する。

公益財団法人滋賀県文化財保護協会
NPO 法人歴史資源開発機構
大沼芳幸

非常に際立った神社の整列といえる。

そして、蛇砂川沿いの神社の多くに、勧請吊と呼ばれる呪物が架けられるのを目にする。

県内の勧請吊の分布をみると、愛知川・蛇砂川・日野川・野洲川流域に特に多く分布する。その形状は、縄を縒り合せた注連縄状の主縄の中央に、トリクグラズと呼ばれるリース状の輪を吊るし、その左右に通常6本づつの小縄を下げる。これは1年を表す。主縄は頭と尾が明瞭に表現されることが多い。主縄の形は「蛇」を象ったと考えると理解しやすい。そもそも注連縄とは、交尾の際に絡まりあう蛇の姿であるともいう。一つの仮説として、勧請吊は水の神である蛇を象徴したものであり、これを掲げることにより蛇神からの水の恵みを一年を通して得たい。そんな心象が込められている、とも解せられる。

蛇神に打ち込まれる矢

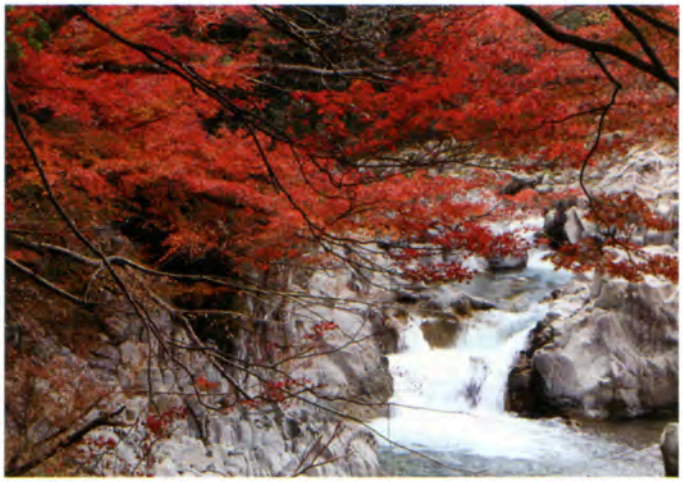
勧請吊は、新年の行事として掛けられることが多い。そして、この際、弓射ちの神事が同時に行われることも多い。弓は、鉄砲伝来以前の最強の武器である。この事から、新年を期して村落の中に「魔」が侵入するのを撃退する。といった意味が込められているとされる。無論、その意味も込められているであろうが、もっと多様な意味もあるように思える。

正月行事には、太陽の力が一番衰え、底を打ったその力がV字回復することを祝う行事という性格がある。また、弓矢には、玉依姫を身籠らせ、加茂別雷神(かもわけいかづちのみこと) を生ませた丹塗矢に象徴されるように、命を注入する力があるとも考えられて来た。この力に着目するならば、正月に打ち込まれる矢は、衰えた神に力を注入するための行事とも考えられる。

そして、勧請吊にも矢が射込まれる。

日本武尊・稲依別王・大蛇・勧請吊と、取り留めなく事象を並べてきた。ここには、川を制し、土地を開発した先覚である日本武尊とその一族、そして蛇神との葛藤の物語があったように思える。敵対した蛇神はやがて人と融和し、人を見守り、人もまた蛇神の復活を祈る。

伊吹泉神社の湧水


多賀町大蛇ヶ淵

竜王町小口真気神社勧請吊に打ち込まれた矢

日野町熊野神社「お祈り」

水の悦び 1　湧水

様々な水の恵みの中でも、最も大きな恵みは「人がそのまま飲める水」ではないでしょうか。蛇口をひねれば無尽蔵に飲み水が出てくる時代、今更、自然の水を飲まなくても良いのでは？しかし、水道の水は、人間が飲めない水を浄化した「文明の水」。今、私たちを癒し、喜びを与えてくれる文化を造った先人たちが飲んでいたのは、大地が生み出す自然の水、言うなれば「文化の水」。山に降り、大地が磨いた文化の水を何もせず、そのまま頂く時、自然の中に生きる「人」という生き物の、悦びを味わうことができます。

湧水 1　京の水

東近江市黄和田町

旅人の喉を潤す八風街道の名水。硬度18という軟水で、お茶が鮮やかに発色。

湧水 2　山比古湧水

愛荘町松尾寺

宇曽川の源流近く、伊勢参りの人達も味わった。近くの山比古地蔵に由来。

湧水 3　十王水

彦根市西今町

犬上川の伏流水が湧き出る。この水を飲むと母乳に恵まれるとも。湖東三名水。

湧水 4　銘水ゼリー

愛荘町蚊野

愛荘町に湧き出る水を時間をかけてゆるーく固めた逸品デザート。何も加えない。

水の悦び 2　水を配る

人間は、未だに食べ物を創り出すことができません。全て、自然の生き物が造り出したものをそのまま、或いは文明力を駆使して加工したものを食べています。その大元の食料をつくる生き物たちも、水を必要とします。特に、日々の暮らしに欠くことのできない農作物。これらを効率よく育てようとすれば、天水だけでは無理です。作物を育てるため、川に堰を造り、用水路を掘り、作物たちの元に水を配ります。作物たちは配られた水を体に吸い込み、稔に変えます。その稔を頂く悦びが、近江の文化の基礎を造りました。

水配り 1　小さな谷の小さなダム

東近江市黄和田

永源寺の奥で見かけた、水田に水を取るための堰。これで十分。

水配り 2　永源寺ダム

東近江市永源寺高野

下流域に農業用水を配るために造られたダム。この竣工により旱魃が解消された。

水配り 3　出雲井円形分水

米原市井之口

姉川用水。水を平等に配るため、地下を通した水を円形に噴出させる。

水配り 4　狛井

東近江市小脇

用水の開発した狛の長者に因んだ名前。一丁毎に地蔵石仏が安置されていた。

水の悦び 3　醸される水

豊富な水を受け、豊かに稔った米。この米が地から湧き出る清浄な水と出会い、ここに様々な生き物の力が加わり、生まれたのが「お酒」。その民族の主食をアルコールに変える民族は、日本人だけかもしれません。何故なら、お酒は豊穣をもたらす神様が大好きな飲み物だからです。稔と水を豊作への感謝と共に醸したお酒は、まず、神様に捧げられ、そのおこぼれを人間が頂きます。人は様々な芸を披露して、神様を盛り上げてよい気分にさせ、来年の豊作を約束してもらいます。神と一体となる、酔いの悦びがここにあります。

醸す水 1　竜王

日野川に程近い酒蔵で醸される。地場産の酒米を主体に、風土を感じる酒が造られる。

醸す水 2　東近江

愛知川の伏流水を使って醸される地酒の数々。軟水を使った、お米のうまみの際立つ酒。

醸す水 3　多賀

ミネラル分の多い芹川の伏流水を使った酒。硬水の為酵母が活性化し、辛口の酒となる。

醸す水 4　ワイン

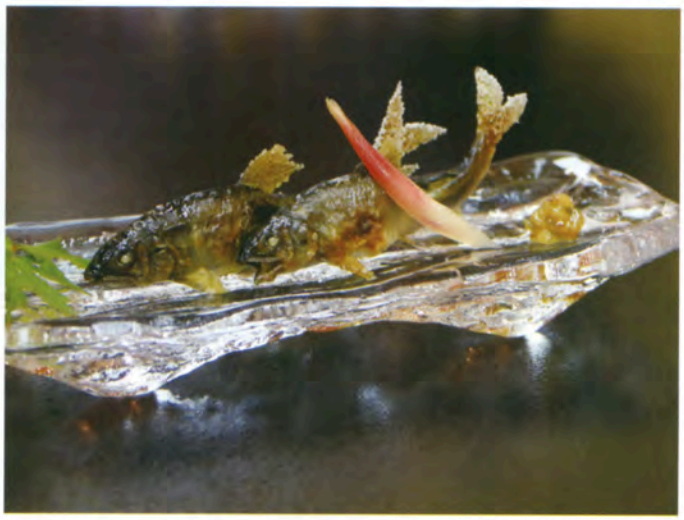
地場産の葡萄で造られたワイン。大地の水だけを吸い上げた葡萄は、水と太陽の子。

水の悦び 4　水の分身を食べる

水の中で生きる魚。魚は水環境にもっと強い影響を受ける生き物です。魚は、自由に泳げる水が無ければ生きてゆけない。しかも、魚により好む水環境が異なります。それぞれが好む水環境の下で、元気に魚が泳いでいれば、そこは、その水を頂く人間にとっても好ましい水環境なのでしょう。いわば、魚は、水環境の現状を私たちに知らせるバロメーターといえます。魚たちの発するシグナルを受け止める方法。それは、その環境で生きる魚を捕らえ、食べる事です。命を頂き、考え、命を継ぐ悦びを味わう。

水の分身 1　岩魚の塩焼き

河川の最上流の生息する岩魚。清浄で冷たい水の元でしか生きることができない。



水の分身 2　鮎の塩焼き

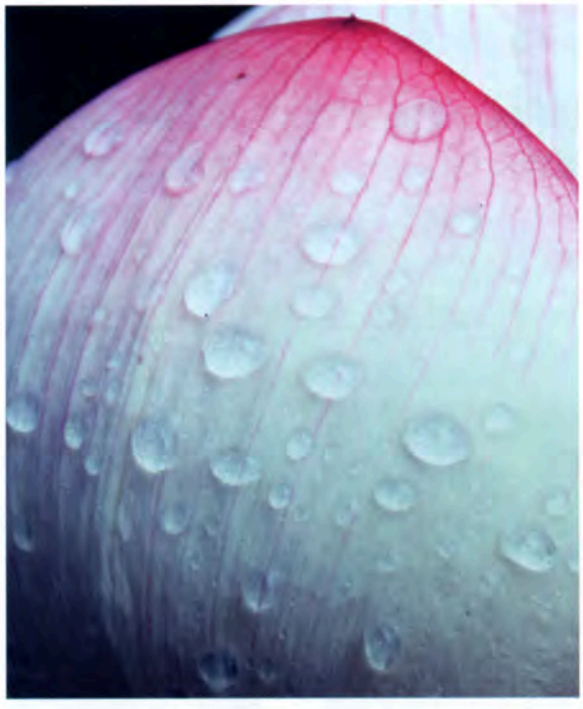
河川の中流に生息する鮎は、沿岸の水田開発と共に生息域を上流に広げていった魚。

水の分身 3　鰣の塩焼き

鰣は、琵琶湖の沿岸と河口を行き来する魚。夏の到来を告げる味覚。

水の分身 4　琵琶鱒の一夜干し焼き

琵琶鱒は、琵琶湖の深場に棲息するが、秋の大雨の河川増水に乗じて遡上し産卵する。



鈴鹿山麓混成博物館とは

鈴鹿山麓にある、東近江市博物館グループ（近江商人博物館、中路融人記念館、西堀榮三郎記念探検の殿堂、能登川博物館）・愛荘町立歴史文化博物館・多賀町立博物館が中心となり、関係する観光協会や民間企業とも連携し、鈴鹿山麓の文化を地域の資源として発信するため、2018年に結成された団体です。

http://suzuka-sanroku.com/
〈事務局〉多賀町立博物館 Tel 0749-48-2077
e-mail　museum@town.taga.lg.jp

鈴鹿山麓混成博物館フォーラム2019

水の悦び

開催日　2019年9月7日（土）　13:30〜16:30
鈴鹿山麓混成博物館
会　場　大津市勤労福祉センター５階大ホール

発　行　2019年9月7日
鈴鹿山麓混成博物館
制作・編集　NPO法人歴史資源開発機構

文化庁　この冊子は、平成31年度地域と共働した歴史博物館創造活動支援事業の採択を受けて作成しました。